



特定医療法人社団

鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.hoyukai.org/>

発行:2013年8月15日
発行責任者: 特定医療法人社団 鵬友会
事務局長 池島 守



～地域に必要とされる病院

をめざして～

新中川病院 事務部長 松田 隆

法人本部より新中川病院事務部長の命を頂き早いもので6年目の夏を迎えています。いろいろな事がありましたが、懐古録を語っている時間は、無駄使い以外の何物でもありません。何故なら病院は生き物だと私は考えています。日々刻々と変化して別の顔をみせます。ですから振り返るのは定年退職後にとっておきたいと思います。

私の目指す新中川病院の方向性は「地域に必要とされる病院」「職員が身内を入院させたいくなる病院」です。当院周辺地域は、横浜市内でも高齢化が進んでおります。大学病院、地域中核病院もありますが、

- ①急性期を過ぎた高齢者が引き続き入院継続になった場合
 - ②老健・特養・その他老人ホームにて医療的処置の必要性が高くなった場合
 - ③老老介護など在宅での生活が厳しくなった場合
- 多種多様なケースや家族背景があります。むろん当院側にも患者さんの望む医療や看護、介護等をかなえられない場合もありますので大風呂敷を広げるつもりはありませんが、基本的には「断らない病院＝地域に必要とされる病院」となるのでないかと考えています。

次に「職員が身内を入院させたいくなる病院」この言葉は、よく聞きますが古くて新しい課題です。今から20年以上前、私が学生時代に教授が取り上げた有名な逸話を今でも覚えております。

(しかしその後私は、大手スーパーでアルバイトをした時、鮮度管理の厳しさに唖然として、私の中では寓話となりました。)内容は「流通業界では良いスーパーの見分け方として総菜売りのパート主婦が、休憩時間中にプライベートな買い物をしている店は安心で

きる。」という内容でした。総菜売り場は、その店で商品として売るには二流となった照明で焼けて黒くなった肉、しなびた野菜、売れ残りそうな魚、賞味期限の迫った調味料等を使って別の商品に蘇らせる部署だそうです。そこで働く社員ではなくパートの主婦は、ある意味何のしがらみのない立場にも関わらず自分の店の商品を買う。という事は、バックヤードの事情を知っている主婦が自分の家の食卓にのせる食材を購入する＝信用のできる店である。という内容でした。この寓話を病院に当てはめるにはかなりの無理がありますが、参考にはなります。

現在当院には、医師、看護師をはじめとして国家試験及びそれに準ずる資格保持者18職種が在籍するプロ集団です。それぞれが専門的視点から自院を見て評価した時、「全職種から及第点をもらえた時＝職員が身内を入院させたいくなる病院」と私が勝手に決めたゴールです。残念ながらまだそのゴールは、輪郭はかすんで見えますが完全には見えていません。「もしかしたら一生たどり着けないのかも知れない・・・自虐？」とネガティブな気持ちにもなります。そんな時1人ではどうにもなりません当院の誇るプロ集団の力を借り自分のわがままに共感して頂き一緒にゴールを目指せばと考え日々仕事をしております。

追記

来年は、診療報酬の改定の年となります。2年に1度日本全国の医療機関が、今後の経営方針を決める上で避けられない事ですが「風に枝葉の揺れるは仕方なし、されど幹これ不動」改定点数に一喜一憂するのではなくブレない方向性すなわち幹を太くできるようにこれからも努力を惜しまないつもりです。

第10回 医療法人社団鵬友会 幹部研修会

平成25年7月26日 - 27日に箱根のホテルにおいて、第10回医療法人社団鵬友会幹部研修会を行いました。研修会当日は約50名の幹部職員に、理事長や常務理事をはじめ、各院長から熱いメッセージが送られました。



児玉 理事長

開会の挨拶では、児玉理事長が「医療福祉業界は厳しい情勢ですが、私たちは生き残っていかなければなりません。」そのためには、**《強い者（大きい者）が生き残れるとは限らない。変化できる者だけが生き残れる。》**という言葉を用い、今後の方針を示しました。

続く池島常務理事の講義では、国が打ち出している2025年問題に向けての方向性を分かり易く説明し、法人の今後の課題や今やるべきことを話しました。さらに、【企業とは人である】【幹部職員が率先して行動する（有言実行）】【噂や風潮に惑わされず、自分の目と耳で確認し、判断する】と、幹部としての心構えを述べ、幹部職員を鼓舞しました。



池島 常務理事



福田 院長



日野 院長

◆各病院長の言葉

◆新中川病院【一般・療養病床を持つ高齢者専門病院】：福田院長

「幹部職員の皆さんは、幹部になって何年が経ちますか？初めの頃と現在を比べて、成長したと思えますか？」【企業とは人である】法人を支える人が全力で力を注いでもらわないと、医療福祉業界の中では生きていけません。組織から選ばれた人として何百人もの従業員、家族を入れると何千もの人たちの生活を守るという責任と自覚を持って努力してもらいたい。また、今後30年、50年と続けるためにも、【組織を守って育てないといけない。】人が変わっても時代が変わっても、地域に愛される法人になるために、常に前に向かって鵬友会を支えてもらいたい。と述べました。

◆横浜ほうゆう病院【認知症専門病院】：日野院長

①認知症の医療・介護について、より専門性を高める②認知症疾患のQOL（「人生」の質）のQualityを高める医療・介護を目指す③病院機能評価受審で得られた「知恵」と「力」で継続的な改善を④入退院の効率化によって経営のさらなる安定化を目指す。この4つが今年度の目標。また、認知症疾患医療センター（地域型）の認定を検討していきたい。と述べました。



創立30周年

—地域の安心を支え続けた30年—

◆医療法人社団鵬友会 30周年

今年で鵬友会は30周年を迎えます。その記念式典が8月31日にあり、その時に上映する法人の歴史をまとめたDVDを披露しました。懐かしさや歴史などを会場全体で共有しました。